

## 第 25 回連続講演会

### ESD 論戦～「持続可能な開発のための教育（ESD）論」ミニシンポジウム～

平井 朗氏

環境・平和研究会共同代表・大東文化大学非常勤講師



平井です。よろしくお願いします。「脱開発コミュニケーション」という耳慣れない題で話を進めていきます。「脱」のつかない「開発コミュニケーション」というのがそもそもの私の専門領域ですが、それすら多くの人にはたぶん知られていないと思います。私はもともとテレビのドキュメンタリーの制作者でした。その後、青年海外協力隊員としてスリランカに行ったことをきっかけに、国際協力機構（JICA）に長らく関わってきました。さらに、ラムサールセンターという環境 NGO での活動なども通じて、IEC（教育普及広報）専門家として活動を続けてきました。IEC は、国際協力業界、ODA の世界では「開発コミュニケーション」という言葉でも呼ばれています。テレビの現場で 10 年、国際協力の現場で 20 年、計 30 年ほど働いてきてその中でいろいろ持ってきた疑問をもとに、40 歳代終わり頃から大学院で研究を始め、2 年前に博士号を頂きました。

今日は平和学の立場からの発言ということなのに、平和という言葉には少し反するかもしれませんが討論は盛り上がった方が面白いので、少し刺激的に述べさせていただきます。そこで私が言いたいことは、ESD の「Sustainability」は必要ですが、「Development」という言葉は使うべきではないのではないかと思います。そういう自分自身も実際には JICA の業務を行う「開発コンサルタント」に所属しています。開発に関わっている人間が「開発」という言葉を使うべきではないというのは自己矛盾も甚だしいと思われるかもしれませんが、あえてそれを主張する意味をこれからの話の中でご理解頂ければと思います。

平和学という言葉自体もまだそれほど認知度が高くありません。平和学という学問は、平和構築といった政治学的な分野からのアプローチで考えられる方が多くて、環境問題につながっているという発想は意外となかったりします。きょうここで述べる平和学は、単に戦争を回避したり、紛争防止の手立てを研究するというものではありません。ノルウェーの平和学者ヨハン・ガルトゥングは「平和とは暴力の不在である」と定義しており、その暴力とは、ある人や人々の潜在的な実現可能性を阻害する力と定義しています。そしてガルトゥングの一番大きな功績は、「構造的暴力」というその行為者が不在で社会の中に組み込まれた暴力を発見したことです。それは「社会的不公正」とも呼ばれます。この構造的暴力に対して加害者がはっきりしている暴力を直接的暴力と言います。構造的暴力と直接的暴力の違いは、例えば、ある子どもが持っているパンを大人が奪えばこれは直接的暴力です。一方、目の前のお店に山ほどのパンがあるにもかかわらず、そのパンを買えずに飢えて死ぬ子どもに対しては、構造的暴力がそこに働いていると考えます。平和学は、構造的暴力の発見によって、格差や抑圧や差別といった社

会構造に組み込まれる暴力まで対象領域を広げていきました。社会の中において先進工業諸国と第三世界（多くの場合開発途上国と呼ばれる）の格差を生み出す構造をしっかりと分析して、その状況を変えていくためにはどうすべきか、その答えを「暴力」概念で分析する中で構造的暴力が見出されたのです。

近代においては、公正（平等）への志向が存在し、一方で、開発への志向というものも続いてきました。公正（平等）への志向は社会的公正という構造的暴力のない状態を目指すものでありますが、一方で物質的豊かさを求める開発への強烈な志向の中で社会はずっと進んできたわけです。つまりこの二つは同時並行して、さも両立するかのように進んできました。しかし、フランス革命で謳われた自由、平等、博愛（友愛）が誰のためのものであったかという点、それは西欧の白人たちのものでしかなかったわけです。つまり「公正」は西欧世界で実現を目指されたが、実はそれは植民地という外界の収奪の上に成り立っていたというものでした。開発に伴う苦痛を外部化することによって、開発（の果実）と公正が矛盾しないものであると思込み、思い込まされて、開発主義という一種のイデオロギーが生まれる素地となったのです。

では、開発に組み込まれた構造的暴力を克服するためにどうすればいいのかについてですが、多くの開発関係者が開発主義による環境破壊や社会的格差の拡大などの弊害に気づいてきたために、これまで経済開発から持続可能な開発へ、また社会開発、人間開発など、オルタナティブな開発の発明、いわば開発のモデルチェンジが行われてきました。しかし、私が思うに、それらは残念ながらすべて開発主義の枠の中にあり、その暴力を増やしてしまう仕組みそのものを変えていくためには一旦「開発」という言葉自体を忘れる、つまり開発主義から脱却することが必要であると考えます。そういう意味では、ガルトゥング自身も構造的暴力の克服のためには開発研究が必要であると言っていることから開発主義の枠内にいるので、平和の実現のためにはガルトゥングも批判的に取り入れていく必要があります。

「開発（Development）」という言葉が現在のような意味で使われるようになったのは、1949年トルーマン米大統領による「ポイント4」計画の発表まで遡ります。今言う「開発」はその時に発明された言い回しであり、開発主義はそこから生まれたイデオロギーであったわけです。この当時、米ソ対立はすでに始まっていたので、その両者がどちらにも属さない旧植民地・第三世界を自分らの陣営に組み込むという極めて政治的な意図を達成するために「開発パラダイム」を前提とし、開発を諸政策の最優先目標に掲げて国家的動員をはかる開発主義が生まれました。これに対して、マイノリティではありませんが欧米でもイヴァン・イリッチやC・ダグラス・ラミスらによる、本来「Development」は自動詞で、中に秘めている潜在可能性が播種したら自ら出てくるような自動詞的な意味があったにもかかわらず、外から引っ張り出されるような意味にすり替えられてしまったとする批判があります。この発展のメタファの意図的な誤用に、そもそもの問題の始まりがあるのです。

開発主義は戦後「開発」という言葉が使われるようになってから突然生まれたわけではなく、「快」を増やすことが幸せであるとする考え方が近代以降ずっと存在し、我々の中に内面化されてきました。そのため、それを否定することはなかなか難しいわけです。例えば、どこかを開発するとき、その自然環境が破壊され、また住民が移転を余儀なくされることになっても、開発による利益を天秤にかけて、その方が大きいと誰かが判断し、開発をするべきであると決めます。しかし、本来一旦破壊されれば二度と元に戻せない、またモノや金銭で補填できない自然環境／社会環境と開発がトレードオフの関係にあると考えてしまうこと自体、開発主義を内面化しているからなのです。このように開発主義イデオロギーが私たちの思考の枠組み自体を規定・定着するに至ってしまったというのが「開発パラダイム」であるとすれば、開発と平和は並立しないし、開発と環境ももちろん並立しないでしょう。

次に開発と開発コミュニケーションの歴史的な変化についてですが、主流の開発が大々的に行われた

のは1950年代から1960年代にかけての頃です。特にアメリカが自らの裏庭とっていた中南米において、多額のお金を投入して経済開発を行っていました。それを進めるために一方では、アメリカは各国政府にテレビ局をプレゼントし、そこでアメリカの豊かな生活を映したさまざまな番組を流したのです。私も子どものころにアメリカ製のテレビドラマをたくさん見ました。一家に2台の車や、大きな冷蔵庫にびっくりしたものです。そういう映像を見て、今の我々は遅れているからアメリカみたいに変わらなといけないと皆が思うようになることが期待されたのです。当時の主流の開発理論はロストウなどの単線的な経済発展史観で、世界中がアメリカのようになることが目標であり、いずれはそこまで到達できるというものでした。右上がりの単線の上に数珠つなぎの列車のように各国が乗っかっていると考えられたわけです。そしてそういう考えを広めるためにテレビのような中央集権的なビッグメディアを使った開発コミュニケーションが行われました。ところが結果的には全然上手くいきませんでした。主流の開発の結果、1970年代から1980年代にかけて中南米諸国は債務が非常に大きくなり、多くが軍事政権か革命かという不安定な状況になりました。このような開発の失敗から、1980年代には先ほど紹介したオルタナティブな開発理論が出てきました。併行して開発コミュニケーションも人形劇や紙芝居、また小規模な地域ラジオのようなスモールメディアで民衆の中に入って行く方向に目が向けられました。ところが、私も実際にそのようなオルタナティブな開発コミュニケーションに関わってきて、これではスタイルだけを変えただけで結局は主流の開発と同じではないのか、今までやってきた開発コミュニケーションは、第三世界における開発主義の暴力をむしろ増やしているのではないかという疑問が出てきました。

コミュニケーションは個と共同体における精神・知・思想を伝え、継承する相互行為であり、また共同体ともっと大きな社会構造の中でのさまざまな相互行為でもあるという点で、内的自然としての身体や自然環境の中での代謝や社会的代謝に相当し、人類を存続させるサブシステム（生存基盤）の一要素であります。代謝が損なわれることで健康に支障をきたしたり、社会的代謝に問題が起こることが公害を生じさせたりするのと同様に、コミュニケーションのあり方によって、人間の社会的関係に問題が生じます。サブシステムの一要素であるコミュニケーションではありますが、実はそのコミュニケーションにはサブシステムを守り回復するベクトルと、逆にサブシステムを壊してしまうベクトルが同時に存在するのです。

一口にコミュニケーションという中の相反する二つの方向性を持ったベクトルを、ユルゲン・ハーバーマスは「コミュニケーション的行為と戦略的行為」、パウロ・フレイレは「コミュニケーションとエクステンション」と呼び、私は「脱開発コミュニケーションと開発コミュニケーション」と定義しています。これは「サブシステム志向で暴力を克服するコミュニケーションとパックス・エコノミカ（経済平和）志向で暴力を増やしてしまうコミュニケーション」というふう言い換えることもできます。

パウロ・フレイレは『伝達か対話か』において「関係的な存在として生きている」人間は、ただ世界を受け入れるのでなく、人間だけが自ら不条理や非正義を変革できることを強調し、その過程を「意識化（Conscientization）」と呼びました。

この「脱開発コミュニケーション」（ハーバーマスの「コミュニケーション的行為」、フレイレの「コミュニケーション」に対応する）でどのように構造的暴力を克服していくのかということで、「はさみうち」を紹介させていただきます。実際の事例ですが、富山化学の赤チン工場が水銀など使用していて、産業公害を引き起こしていました。被害住民の反対運動に対して工場は韓国インチョンへ工場移転させるという対処法を取ろうしたわけですが、「公害輸出」先である韓国側住民の反対と、韓国の人と同じ苦痛をもたらしてはいけないという日本側住民の反対のはさみうちによって、工場移転計画自体を消滅させ

たということがありました。開発のような巨大な暴力の構造に対しては、ある共同体の中で形成された自力更生主体だけで対抗するには力が足りません。そこで暴力の被害者(当事者)と外部との連帯を意識化して作り出すコミュニケーションが必要となります。このような第三世界、私の場合主にフィリピン・ネグロス島の人々との連帯のコミュニケーションに今も関わっています。さらに、自分自身が批判する ODA による開発のコミュニケーションにおいても、できる限り脱開発コミュニケーションのベクトルを増やしていくよう試みています。私にとって脱開発コミュニケーションは単なる研究対象や抽象的概念ではなく、自らの実践そのものなのです。

きょうは、ESD という概念の中の **Development**、開発に潜む開発主義の暴力とその克服、および私の専門であるコミュニケーションにしばってお話しさせていただきました。どうもご清聴をありがとうございました。